

# ICET



no.10

'94 vol. 3

**Toward a more livable earth**



# 先進国の環境協力の現状と課題

本年7月にICETTの新顧問に就任いただいた軽部征夫教授とRolf D. Schmid教授に、日本やドイツ等の先進国の発展途上国に対する環境協力のあり方や問題点などについてお考えを語っていただきました。

(インタビュアー：野田真男企画部長)



## ドイツにおける国際環境協力の現状

野田 シュミット先生にお伺いします。ドイツでの国際環境協力はどのような国に対して、どのような活動が行われているのでしょうか。

シュミット ドイツの環境事情や環境技術あるいは技術移転の問題等を考える場合、いくつかの地域に分けて考えることができます。

まず、第1の地域はEU(欧州連合)の政治圏内にある地域です。ドイツは大陸の一部ですから、他の周辺諸国と直接利害を共有する圏内にあるため、同じ川の水を飲む周辺諸国と環境を分かち合っており、また大気汚染についても極めて密

接な関係にあります。例えば、ドイツ西側の国境線となっているライン河は6カ国を流れ、ライン河の水を飲んでいる人口は5千万人にも及びますから、この資源の汚染を防ぐことは国際的な関心事となっているわけです。北ヨーロッパのEU地域では、環境基準等に関しては各国間の協調が大いに進んでいますが、北ヨーロッパと南ヨーロッパでは、環境技術や基準にまだかなりの違いがあるため、スペイン、イタリア南部、ギリシャなどの南ヨーロッパのEU地域に対しては相当の技術移転が進められています。

第2の地域は東欧方面です。ドイツの統一とコメコン体制の崩壊後、東欧諸国の環境基準がEUの基準に達するには、

まだなすべきことが数多く残されています。河川や特にバルト海等の海洋はドイツは東欧諸国とも共有しているわけですから、技術移転はこの地域にとって極めて重要な問題です。事実、ドイツからの技術移転に支えられた大型事業が、現在ヨーロッパ北東部で進められています。

最後は発展途上地域です。ドイツは国際的な開発援助の有力な出資国ですから(日本がトップだと思いますが、ドイツも上位5カ国に入っています)、アフリカ、東南アジア、ラテンアメリカ等の国々を支援して、その環境技術移転体制の向上を図る活動に活発に取り組んでいます。

野田 そのような活動は政府ベース、すなわち公式ベースとして行われているのでしょうか、それとも主として民間団体を通じての活動なのでしょうか。

シュミット 両方ですね。正確に言えば、開発援助に関わる政治的な場合は政府が主体となるケースが多いのですが、環境技術は、規模を広げつつある重要なビジネスでもあり、いま具体的な数字はありませんが、ドイツは環境技術の輸出国としてナンバーワンですので、産業界

## 目次 '94 vol. 3 no. 10

● 特集 ICETT新顧問インタビュー .....	2
● ICETT派遣専門家レポート	
インドネシアでの環境技術指導 .....	5
鈴鹿山麓の風物詩② 智積養水 .....	8

も自身の裁量で市場を開発していることは確かです。ですから政府、民間両者の主導というのが正しいと思います。

### 先進国の環境協力のあり方

野田 次に軽部先生にお伺いします。今シュミット先生からドイツの状況をお伺いしましたが、日本あるいはドイツ等の先進国が、途上国に対する環境協力をどのようにやっていったらよいかについてお考えをお聞きしたいのですが。

軽部 日本にはご存知のように20数年前に既に公害問題がありました。そのころ、日本はまだ途上国だったわけですが、その公害問題を解決するために、日本の場合は民間企業がベースになり、結果的に膨大な資本投下をしたわけです。その後、日本は先進国の仲間入りをして、こんどは逆に日本のお金で海外を助ける立場になってきています。具体的にCO<sub>2</sub>の問題が起こったのは3、4年前ですが、それでまた環境問題に対する国民の意識が高まってきました。そこで気がついてみると、日本は環境先進国だということがわかってきて、発展途上国にはほとんど無償で環境技術を提供する、先進国には有償でその技術を移転する、というようになったのではないかと思います。

また、ODAで途上国へ最も支援しているのは日本です。そのODAを活用して日本の適切な環境技術を途上国に移転することが大切です。特に日本はアジアの国々に対して、問題を解決するための技術協力をすることが大きな目的だと思います。

ただ、いままでの問題は、ODAから多額の資金を出しても、それが相手の国に役に立っているかどうか、はっきりわからない状態だということです。ですから、これからは、適切な環境技術をODAのお金を使って途上国に出すと同時に、人を送ってその国の人々を育成する、あるいはむしろ日本に呼んでICETTを利用してトレーニングし、その技術がきちんと動きだすまでフォローアップという形で、途上国を助けるべきだと思います。そこまでしないと、日本で出したすばらしい環境技術が、結局は使われないということになりかねません。

やはり、世界の安全保障だけでなく、環境安全保障を提案していくなど、そういう点で日本は世界のリーダーにな

るべきだと思います。

野田 シュミット先生はこの点についてどうお考えですか。

シュミット そのお考えには全面的に賛成で、ICETTでこの問題を提起して下さってうれしく思います。こうした組織やその他の機関がもっと多く、スタッフ養成やノウハウの普及に努めるべきだと思います。

私の考えでは、途上国で基幹設備を開発する技術者を養成することが、極めて



**Rolf D. Schmid** ICETT 顧問

1942年生まれ。フライブルグ大学大学院生化学科博士課程修了。ヘンケル社・生物工学研究開発部長、ブラウンシュバイク工科大学酵素工学研究部教授等を歴任。現在、シュツットガルト大学教授。

重要であると思います。人口当たりの技術者の数という基準で、先進国と途上国を比較してみますと、その差は100対1にもなります。もちろん、軽部先生が述べられたような問題が発生しつつあり、それについては早急に第一歩を踏み出さなければならぬわけですが、これらの国々では基幹設備の整備も必要であります。残念ながらこれは気の長いプロセスで、ただ技術移転をすれば終わりというように単純にいかない場合が多く、途上国では大学のカリキュラムを開発したり、新しい大学や研究所を建てたりということも必要になってきます。それぞれの国のニーズに見合う土着の技術も開発しなければなりません。ですから、問題は複雑で、様々な手だてを用いて攻めていく必要があると思いますが、もちろんICETTがいま進めていることは、全体的な枠組みの中では極めて重要かつ中心的な部分になると思われます。

また、環境問題の大部分は過剰人口に

関わっているの、いままでお話しした問題とは違うレベルで、人口制御がこのテーマ全体に関わる大きな問題となってきますが、この答えは簡単にはできません。しかし、そのうちのひとつは教育であり、特に女性の教育が大切です。日本やドイツが関与している途上国への援助活動には、こうした女性への教育が大きな部分を占めるとは思いますが、これもやはり早急な解決はあり得ず、長期にわたる取り組みとなるでしょう。これは、迫り来る環境危機を回避する重要な力となるかもしれないと私は思います。

### ICETTの取り組みと今後の課題

野田 ICETTでは昨年度から、通産省の委託でインドネシアのパレンバンで、エコフェニックスプロジェクトというのをやっています。相手国の人と一緒に実態を調べて、何が問題なのか、それを改善するためにどういうことをやったらよいかというプランと一緒に作る、向こうの方々のトレーニングもパッケージで行う、というようなことを始めています。また、今年からはパレンバンにありますが国立大学の方を3カ月日本にお招きして、オンザジョブで日本のやり方をいろいろ勉強していただいています。このような活動をのばしていけば、よりよいものになっていくと思うのですが、先生方はどのようにお考えでしょうか。

軽部 非常に良いことを始めたと思います。環境という問題はそこに住んでいる人が大事なのであって、彼らが環境をどうしたいと思っているのかが問題です。日本人が考えるように、この川をただきれいにすればいいんだ、ということではないのです。我々が現地の人と話をしないで、環境技術だけを押しつけるということになると、その技術が彼らにとって適当なものかどうかということが問題になります。やはり、その場所に行って、もし川がすごく汚れているのなら、その川がどういう目的に使われているのかを現地の人に聞いて、彼らの川の利用の仕方を損なわないような形で川をきれいにする技術を持ち込まなければいけません。環境解決のプランは現地で作ることが大事だと思います。インドネシアの状況とタイの状況は全く違う、ベトナムへ行くともまた生活態度も環境問題も違います。ですから同じ川の水が汚れていても、地域によって全く違う、そこを

日本から行って、そこでコーディネートする、そしてそれに合うような装置を日本から送るといことが大事だと思います。環境問題解決のためのコーディネーターとしてICETTがいま一歩足を踏み出しているとして、私は高く評価していますし、ICETTの本来の姿はそうでなければならぬと思います。

また、場合によっては、こちらで開発して途上国に合った技術として持ち込むようなことが、ICETTとしてもだんだん必要になると思いますね。というのは、途上国に出す技術というのは、ビジネスとしてはほとんどメリットがない訳です。企業としては、やはり収益性が優先されますから積極的にになりにくい。そうするとやっぱり公共の機関ですね。そうすると、ICETTに対しても、アジアの国々からこういう技術が欲しいというように、どんどん要求が高まってきて、企業を紹介するといった形では対応できなくなるんじゃないかなという気がしますね。ICETTに行って適当な技術を自ら改良して持ち出すということ、やらざるを得なくなる。そうすると、人材とのリンクとか技術の開発のためのインフラストラクチャーを整備していけば、もっとICETTのアジアに対する環境面での貢献の輪が大きくなると思いますね。

野田 シュミット先生にお伺いします。途上国の環境悪化を防ぐために、行政的な手法によって行う部分と、民間企業が対策をとる場合といろいろあると思うんですが、日本の場合、企業が環境保全設備を開発し、工場にそれを設置して技術をブラッシュアップしているわけです。ドイツの場合、先程のシュミット先生のお話にもありました通り、環境保全協力といった中で、公害防止技術をもっているのは民間企業だと思うんですが、そういうところに対しての政府等の考えはどうなっているのでしょうか。

シュミット 問題は経済と環境との調和を図ることですが、これは、わが国ではある程度実現してきており、いまやその規模が拡大していると思います。従って、既に自国で達成されたことを広げていくには国を越えた機構が必要になります。ヨーロッパでは、現在EUが主力となっていますが、EU地域では、一面では、環境技術をはじめ様々な分野で各企業間が競争を続けていますが、他方、同じ環境を分かち合っているのであり、そ

のために良い解決方法を見いださなければならぬのです。従って善意と協力に基づき、様々の方策を用いて、さらにその範囲を拡大していくことがきっと可能であるに違いないと信じています。

野田 もう一つ、先進国と共同して一つのプロジェクトをやっていくことも必要になってくると思います。今までのところ、ICETTには先進諸国が途上国に対して、どういう機関がどういう仕事をしているのかという情報がありませんの



かるべいさお  
軽部征夫 ICETT 顧問

1942年、東京生まれ。東京工業大学大学院博士課程修了。イリノイ大学博士研究員、東京工業大学資源化学研究所助教授、同教授を歴任。1988年より東京大学先端科学技術研究センター教授。

で、そういうところを充実していくことも必要だと思っておりますが、それについてどうお考えでしょうか。

軽部 学問に国境はないといわれていますが、これはいわゆる、技術に国境はないということなんです。ところが、今では東西問題がある意味で解決して、あと南北問題もこれからだんだん解決に向かっていく。そうすると、国という存在が薄れていき、もう国と国がやるというよりは、むしろ機関と機関という形になってきています。これはポータレスの時代に入ってきた証拠だと思います。そういう中で、お互いの持ち分を出し合っていくことが大切です。日本は水処理でも、例えば生物処理が得意だ、ドイツは物理処理が得意だということになりますと、それじゃ生物処理と物理処理をくっつけて、それで現地からの要望を聞くといった形でやっていくべきだと思いますね。

そうすると、日本国内だけではなく、世界中の各機関がどんなことをやってい

るかというデータベースが必要になります。その点では、世界はマルチメディアの世界になっていきますから、Eメールなんかもどんどん活用すると思えますよ。Eメールを利用してお互いに情報を全部インプットしておく、ICETTは世界中の機関がどんなことをやっているか全部知ることができます。場合によっては日本の産業の環境技術を登録するのは全部ICETTがやればいいんです。しかも、相互のコミュニケーションが簡単で、世界中の機関がテレビのカメラを通して、テレビ会談ができます。ですから、今野田さんが言っているようなことが、マルチメディアを活用することによって、今すぐにも実現するんじゃないかと思えます。

シュミット それはとても大切な問題です。実際、私も、世界に広がる目に見えないネット、アメリカで使われている言い方を借りれば、"World Wide Web"（世界規模のネット）については、今やある種の量的飛躍の状態にあります。というのは、光ファイバーのネットワークや衛星放送網を通じて、ごく低価格で図形や地図や込み入った写真などをやりとりできるからです。とはいえ、これは工業諸国の範囲内で可能なことで、軽部先生が指摘されたように、こうしたことを先へ進めるのは我々の果たすべき義務なのであります。そうなれば、住民の多くが、自分の住む地域の環境のあり方に目を向けるようになるでしょう。これも、状況を改善し、その状況に適した技術を開発する大きな推進力となるでしょう。

私の考えでは、日本やドイツでの推進力は、政府ではなく一般住民から生まれていると思います。市民は認識を深めており、政府を促して状況改善に向けるには大きな力になると思います。

軽部 そしてもう一つの問題は、計画に関わる途上国をどう支援していくかということです。国連は世界中の国々が出会う場所ではなく、なんら権力をもっていません。OECDは先進諸国の集まりにすぎません。だとすれば、解決すべき環境問題を誰がチェックするのか？ 誰がそのような会議を組織するのか？ これは今後解決しなければならない大きな問題です。

野田 どうもありがとうございました。（インタビュー：1994年9月28日）

# インドネシアでの環境技術指導

秋山健三

国際協力事業団（JICA）がインドネシアを対象に実施している技術協力プロジェクト「インドネシア産業公害防止技術訓練計画」（ICETTが支援機関としての役割を担っている）の推進のため、ICETTから、環境保全の指導に当たる専門家としてインドネシアに派遣されている秋山健三さんより、現地での活動状況についてレポートが届きましたので、ご紹介します。

## はじめに

私は、ICETTのご推薦によってJICAプロジェクトによる「インドネシア産業公害防止技術訓練計画」（TIPPT）の技術専門家として、1994年6月末以来このジャカルタに赴任しています。

赴任から、すでに半年が経過してしまいました。この私達のプロジェクトは今回新しく発足した事業であり、5人のチームメンバーのうちコーディネーター（調整員）川喜田さん以外は海外勤務も初めて、インドネシアも殆ど初めてというホヤホヤづくめのスタートでした。あちこちで頭をぶついたり、擦りむいたり、反省し、試行錯誤しながら今まで来たという感じがします。

## プロジェクトのこと

私達のプロジェクトの目的は、発展途上国にあって、これから一層の産業発展が期待されると同時にだんだんと産業公害が深刻化していくインドネシア国に対して、これを未然に防止して、健全な発展が遂げられるよう、産業公害防止の技術やノウハウを、こちらの工業省傘下の職員の人達に移転しようとするものです。専門分野は大気汚染防止、水質汚濁防止、産業廃棄物処理の3つに分かれていまして、私は大気関係を担当しています。私のほか水質関係には造水促進センター推薦の久新さん、廃棄物には私と同様、ICETTから推薦の中原さんがいます。後になりましたが、このプロジェクトのリーダーとしてチームをまとめ、代表されていますのは通産省資源環境技術総合研究所（つくば市）から来られた大内さん（工博）です。また先に書きました川喜田さんはチーム内外の調整をはかり、チームの運営をスムーズに持ってい



くコーディネーターとして経験も豊かなこの道のベテランです。

一方インドネシア側とはといえば、技術移転を直接受けるカウンターパートは工業省傘下の化学研究所（BBIK といいます）の技術者 15 人と分析技師や本省の行政官がパートタイムで加わります。仕事の場所は BBIK の中の 2 階建ての建物 1 棟が当てられています。BBIK はジャカルタ市にありますが、市の中心街からは 30km くらい離れた田園地帯で、2 階の窓からはバナナ畑や、いくつも実をつけた椰子の木が並んでいるのが見られ、時折構内に仔牛が繋いであったりして、のどかな雰囲気です。建物は ICETT に比べると、お世辞にも立派とは言えませんが、外観よりも内容であると、一同毎日張り切って門をくぐっています。

ところで、カウンターパートは技術者も含めて女性の方が遥かに多く、この国の女性の社会進出振りを目の当たりにしています。しかし、どうやらこの国では化学の領域は女性の職場であるというのが本当たらしいのです。それはともかく、技術移転を受けた彼女たちが、将来



企業に対し公害防止の指導を十分に行うことができるかどうか、私のような年代の日本人の感覚からは、何となく危ぶまれるような気がしています。

次にプロジェクトの実施状況ですが、今は座学が中心で、産業公害防止技術の基礎となる事項を 3 分野の専門家が交互に講義をしています。今年8月には JICA からインドネシアへの供与機材

として各種の分析機器が入り、9月に約3週間ほどかけて、メーカーから調整と取扱指導の専門家に来てくれました。勿論これだけで全部がマスターできるわけではないので、講義のない時間にそれぞれ実習をするようにしています。来年度になりますと、各専門分野ごとに実習装置がJICAから供与されることになっており、座学で習った技術を実習装置で体得していくこととなります。その他ジャカルタ市を主体に工場の実態調査をする予定でありますし、公害防止の啓蒙活動の一つとして、カウンターパートが習得した技術を発表させるセミナーを行なう計画もあります。また毎年3、4名のカウンターパートが日本で研修を受けるため、ICETT に来ています。

### インドネシアの環境問題

インドネシア全体の環境問題については報告できるほど、つぶさにこの国を見ていませんので、とりあえずこのジャカルタ市とその周辺の様子を紹介することにします。総括的に言って環境問題は一部はやや深刻、その他ではこれからの問題というところでしょうか。大気関係でやや深刻な状態にありますのが、自動車の排気ガスと巻きあげるほこりによる汚染です。ジャカルタ市中心部は道路もよく整備されていますが、自動車の数はおびただしく、ラッシュアワーには3車線の所には5列、5車線の所には8列くらいの自動車があふれ、すき間があれば我れ先にと頭を突っ込んで来ます。日本なら「この野郎!」「馬鹿ヤロー!」で喧々ごうごうというところでしょうが、こちらはそれが常識なのかも知れません。余談になりましたが、特にバスは



工業省の職員に講義する秋山さん

満身きずだらけのボディーから黒煙を吹き出すように走っています。ジャカルタは地下鉄がなく、鉄道も数が少なく、庶民の足は大小のバスに頼っていて、それが数珠つなぎになっています。道路沿いの立派な立木は幹も葉っぱも黒ずんで排気と粉じんのはげしさを物語っています。

工場からの排気ガスによる、いわゆる産業公害はこれに比べるとひどくないと感じられます。しかし工場団地の中を歩いてみたところ、新しい工場はともかくとして、比較的古くからあると思われる鉄鋼関係の工場や化学工場のばい煙、ばい塵、あるいはボゴール市の郊外にあるセメント工場のばい塵、粉じん類が目につきます。これらはまだ数値としてつかんだものではありませんので、これからどうやってアプローチしていくか策を練らなければならないところです。

深刻と考えられるもう一つは水質汚濁です。市内、郊外を問わず、ここは海

に近いせいもあって大小の川が流れています。そのほとんどが濁流です。川の護岸工事が行われている所は少なく、川岸の土砂を運んで流れています。これに周辺から出る生活排水が流れ込みます。川岸に住む人はこの水を飲むことはないにしても、食器洗い、洗濯、水浴、時には用足しをする子供も見つけます。

工場排水についても問題なしとしないうちですが、この分野でもこれからの実態調査がカギになると思います。大気、産廃いずれも同じですが、工場側がどこまでオープンにしてくれるか、私達やカウンターパートがどこまで立入ることができるかが問題です。

全体としてこの国の行政にしろ、企業にしろ、また一般国民にしろ公害というものをどれ程深刻に受けとめ、どれ程真剣に考えているのか。これが今の疑問であり、これからも私達の模索は続くのではないかと考えています。

(1994年12月ジャカルタにて)



鉄鋼工場

### 環境技術専門家登録制度

ICETTでは、発展途上国を対象とした環境技術移転活動を担っていただく環境技術専門家の登録を平成5年度から実施しています。

環境技術専門家の主な活動は

- ・ 研修やセミナーの講師
  - ・ 調査事業の団員
  - ・ 発展途上国での技術指導等です。
- ご関心のある方は ICETT 企画部にご連絡下さい。資料をお送りいたします。

1994年

7月

・【研究開発】地球環境保全関係産業技術開発促進事業平成5年度研究成果報告会 7/11 (於：四日市市)

・【普及啓発】「国連地球環境子供サミット・インしまね」に後援団体として参加 7/30～8/3 (於：松江市)

9月

・【普及啓発】「第2回ICETT環境フォーラムーベトナムの環境事情ー」を開催 9/6 (於：ICETT)

・【調査】「特定地域環境再生計画調査」(エコ・フェニックス)の第一次調査を実施(インドネシア、パレンバン) 9/19～10/1(通産省委託) 写真①

・【受入研修】インドネシア(パレンバン)(8名)「水質汚濁と排水処理技術研修コース」 9/24～10/7(ICETT主催) 写真②

・【受入研修】中国(河南省)(10名)「水質汚濁防止技術研修コース」 9/26～11/14(三重省委託)

10月

・【研究開発】海洋環境観測システム開発研究成果発表会 9/28 (於：ICETT)

・【普及啓発】「国際協力の日」記念イベント“国際協力村 in HIBIYA”に参加。パネル展示によりICETTの活動を紹介 10/1～10/2 (於：東京都内日比谷公園) 写真③

・【普及啓発】「地球環境技術展 GLENTEX'94」を共催して開催。パネル展示等によるICETTの活動紹介の他、環境問題に関する特別セミナーを実施 10/13～10/15 (於：横浜市) 写真④⑤

・【海外研修】中国(遼寧省・瀋陽市)(50名)「環境保全技術コース」 10/17～10/22(AOTS補助)

・【受入研修】東欧(ブルガリア、ルーマニア、スロヴァキア)(7名)「産業公害防止技術研修コース」 10/18～11/27(JICA委託)

・【調査】「アジア・太平洋地域環境技術研究ネットワーク構築調査」の環境問題等に関する動向調査に参加(中国) 10/19～10/27(NEDO主催)

・【受入研修】インドネシア(4名)「産業公害防止技術研修コース」 10/24～12/22(JICA委託)

・【受入研修】中国(天津)(10名)「水質汚濁防止技術研修コース」 10/27～12/8(四日市市委託) 写真⑥



11月

・【海外研修】中国(山東省・青島市)(50名)「環境保全技術コース」 10/31～11/5(AOTS補助、財イオングループ環境財団助成) 写真⑦

・【受入研修】中国(10名)「産業公害防止技術コース」 10/31～12/19(JICA委託)

・【研究開発】国際研究員交流事業研究員受入(インドネシア)(1名) 11/23～2/20(NEDO委託)

・【調査】インドネシア産業公害防止技術訓練計画現地調査を実施(インドネシア) 11/27～12/6(JICA委託)

・【調査】「北東アジア環境と開発に関する国際共同研究に関する国際企画会議」に参加(ロシア連邦) 11/28～12/2(中国国際信託投資会社主催)





▲ 西勝寺前を流れる智積養水

この地域で造られる酒は県下でも美酒としての誉れが高く、三重の地酒の一つとして好評を博している。

しかし、この状態を憂いた地元自治会や地域の住民、子供達が一体となり、美しい養水をなんとか蘇らせようと、養水の浄化活動に取り組み、昭和47年から鯉の放流が始まった。以来、「養水を守る会」が子供会によって組織され、廃品回収等で得た資金で餌を与えたり、地元自治会が水路を定期的に清掃・巡回したりして、この恵みの水を守ってきた。このような長年に渡る人々の努力と実績が高く評価され、昭和60年「名水百選」に選ばれるに至った。

この養水に象徴されているように、豊かで清純な水に恵まれたこの地方は、昔から酒造りも盛んで、桜地区だけでも四軒の酒蔵がある。その一軒の庭先には、自噴井があり、その噴き上げる水の強さを「手を入れて井の噴き上がるものに觸る」と詠んだ俳人山口誓子の句碑が建てられている。

ICETTのある桜地区を流れる智積養水は、全長約1800メートルの灌漑用水で、「名水百選」にも選ばれた清流である。この養水は、鈴鹿山脈に降った雨や雪どけ水が湧き出る蟹池にはじまり、二分八分の堰を経て、金溪川を横断し、智積町の西勝寺に達する。寺の前の水路には大小色とりどりの鯉がこの清らかな水に身を浮かべている。

三重県四日市市

ち　　しゃく　　よう　　すい

# 智積養水



◀ 昔のたたずまいを今も残す酒蔵



ICETT '94 vol. 3 no. 10

編集後記

◇阪神大震災で被災された方々に心からお見舞いを申し上げますと共に、一日も早い復興をお祈り申し上げます。  
 ◇本誌に対する多くのご意見、ご感想、アドバイスをお待ちしています。

発行 財団法人国際環境技術移転研究センター  
 〒510-12 三重県四日市市桜町3690番地の1  
 TEL. 0593(29)8111 (代) FAX. 0593(29)8115  
 編集協力 株式会社スリーアイパブリケーション  
 東京都千代田区内神田 1-5-16 TEL. 03(3291)3761